

高等学校と知的障害特別支援学校との「交流及び共同学習」の効果

相澤雅文*・明石伶香**

(*京都教育大学, **京都府立聾学校)

Effect of “Exchange and Joint Learning” between High School Students and Special Needs School for Intellectual Disabled Students

Masafumi AIZAWA, Reika AKASHI

抄 録: 本研究は、知的障害特別支援学校と交流及び共同学習を行っている学科のある公立高等学校の生徒を対象とし、交流及び共同学習等への意識についてアンケート調査を実施した。対象とした公立高等学校はキャンパスが2カ所に分かれていた。知的障害特別支援学校と同一敷地内に併設されているキャンパスには専門学科が設置されていた。もうひとつのキャンパスには普通科が設置されていた。専門学科のひとつは知的障害特別支援学校のスクールパートナーとなっており、知的障害特別支援学校の高等部等と交流及び共同学習を実施していた。また、普通科は年に3回程度の学校行事の際に特別支援学校の生徒と接する機会があるものの、普段接する機会がほとんど無かった。この2つの生徒群のアンケート結果を比較し、高校生が知的障害特別支援学校と交流及び共同学習を実施することからの効果を検討したいと考えた。その結果、交流及び共同学習や日常的な交流を経験している専門学科の生徒群の障害理解等が進んでいることや積極的に障害のある人と接しようとする意識が高まっていることが示された。その一方で、同じ高等学校に在籍する普通科の高校生にも、年に数回であっても障害のある児童生徒との出会いの機会が、障害に対しての肯定的な意識を育む傾向にあることも示された。

キーワード: 高校生、知的障害、特別支援学校、交流及び共同学習、インクルーシブ教育

Key Word: High school Students, Intellectual disability, Special Needs school, Exchange and Joint learning, Inclusive education

I. 問題と目的

1. 「交流及び共同学習」のねらい

「交流及び共同学習ガイド」(文部科学省, 2019)によれば、私たちの国は、障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し合える共生社会の実現を目指しているとされている。小学校・中学校・高等学校の学習指導要領総則においても、「障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習の機会を設け、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むようにすること」と記されている。

交流及び共同学習は、相互の触れ合いを通じて豊かな人間性を育むことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面があり、この二つの側面を分かちがたいものとして捉え、推進していくこととなっている。

交流及び共同学習の内容は、例えば、特別支援学校の学芸会などの学校行事に中学校の吹奏楽部が参加したり、クラブ活動を合同で行ったり、インターネットを活用してのメールや動画の交換、近年ではオンタイムでWeb交流会を開催することが行われている。障害のある子どもと障害のない子どもが活動を共にする交流及び共同学習は、相互の理解を深めることや、障害の有無にかかわらずお互いを尊重し合うこと、そして、そうした経験を通して豊かな人間性を育むための大切な機会となる。将来の職業生活や社会生活を営む上においても、多様な人々と共に助け合って生きていく力となり得る。

2. 「交流及び共同学習」の変遷

交流及び共同学習の歴史的経緯を遡れば、特殊教育の対象となっていた障害のある幼児児童生徒と、障害のない幼児児童生徒が、学校教育の一環として活動を共にする「交流の機会」を設けることが初めて学習指導要領に示されたのは1970年改定（1971年施行）の「養護学校（精神薄弱）小・中学部学習指導要領」であった。それには「学校行事などを通して、できるだけ地域の小学校および中学校との交流の機会を設けるようにすることが望ましい」と記された。

また、1972年改訂（1973年施行）の「養護学校（精神薄弱）高等部学習指導要領」でも特別活動に、「指導計画の作成に当たっては、学校や地域の実情に応じてできるだけ他校との交流の機会を設けるようにすることが望ましい」とされた。

この後1979年改定（1980年施行）の「盲学校、聾学校及び養護学校小学部・中学部学習指導要領」では「児童又は生徒の経験を広め、社会性を養い、好ましい人間関係を育てるため、学校の教育活動全体を通じて、小学校の児童又は中学校の生徒及び地域社会の人々と活動を共にする機会を積極的に設けるようにすること」と総則に記されるようになった。

1989年改定（1990年施行）の盲・聾・養幼稚部教育要領では「幼児の経験を広め、社会性を養い、好ましい人間関係を育てるため、学校生活全体を通じて、地域の幼児等と活動を共にする機会を積極的に設けるようにすること」と記され、早期からの対応が求められるようになった。また、1998年改定（1999年施行）では「幼児の経験を広めて積極的な態度を養い、社会性や豊かな人間性をはぐくむために、学校生活全体を通じて、幼稚園の幼児及び地域の人々などと活動を共にする機会を積極的に設けるようにすること」といったように、積極的な態度や豊かな心の育成にも視点を向けた内容が記されるようになった。

2008年改定（2009年告示）の「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」では総則に「学校がその目的を達成するため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。また、学校相互の連携や交流を図ることに努めること。特に、児童又は生徒の経験を広めて積極的な態度を養い、社会性や豊かな人間性をはぐくむために、学校の教育活動全体を通じて、小学校の児童又は中学校の生徒などと交流及び共同学習を計画的、組織的に行うとともに、地域の人々などと活動を共にする機会を積極的に設けること」と記され、初めて「交流及び共同学習」の名称が用いられた。また、「特別支援学校学習指導要領解説総則編等（幼稚部・小学部・中学部）」（文部科学省，2009 d）において、障害のある児童生徒等と障害のない児童生徒等との交流及び共同学習が明確に位置づけられた。また、障害のある児童生徒等の側だけではなく、障害のない児童生徒等にとっても交流及び共同学習は大きな意義がある旨が述べられ、障害者理解を深めることや共に学ぶ教育を推進するうえで重要な理念が位置づけられた改定であった。

2017年改定・告示の「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」では、総則の「学校運営上の留意事項」の中で「他の特別支援学校や、幼稚園、認定こども園、保育所、小学校、中学校、高等学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のない幼児児童生徒との交流及び共同学習の機会を設け、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むようにすること。特に、小学部の児童又は中学部の生徒の経験を広げて積極的な態度を養い、社会性や豊かな人間性を育むために、学校の教育活動全体を通じて、小学校の児童又は中学校の生徒などと交流及び共同学習を計画的、組織的に行うとともに、地域の人々などと活動を共にする機会を積極的に設けること」と示され、2019年告示の「特別支援学校高等部学習指導要領」総則の「学校運営上の留意事項」にも、「高等部の生徒の経験を広げて積極的な態度を養い、社会性や豊かな人間性を育むために、学校の教育活動全体を通じて、高等学校の生徒などと交流及び共同学習を計画的、組織的に行うとともに、地域の人々などと活動を共にする機会を積極的に設けること」とされ、交流及び共同学習が学校運営における重要な教育活動に位置づけられた。

こうした動きの中で、知的障害特別支援学校と通常学校との交流及び共同学習を取り上げてみると、小・中学校は学校数も多く、知的障害特別支援学校の近隣にも設置されているという地理的条件から、交流及び共同学習に盛んに取り組まれてきた経緯があった。一方、知的障害特別支援学校と高等学校との交流及び共同学習は、

JRC (Junior Red Cross) 活動やセツルメント活動などのボランティア活動を通しては行われてきたと考えられるが、学科を含む高等学校の生徒との交流及び共同学習は、決して多くはないと推察された。しかし、近年は少子化に伴う高等学校の定員削減、そして特別支援学校の大規模化に伴い、高等学校の空き教室等に特別支援学校高等部の分教室が設置され始めた。柘植ら (2017) は、そうした高等学校に設置された分教室等による交流及び共同学習を含めたインクルーシブ教育が進行しており、その成果と課題を認識し広めていく必要があるとしていた。

また、2017年に決定された「ユニバーサルデザイン 2020 行動計画」において、学校における「心のバリアフリー」の教育を展開するため、障害のある幼児児童生徒と障害のない児童生徒等の交流及び共同学習等について、文部科学省及び厚生労働省が中心となって検討することとされた。

3. 本研究の目的

研究対象とした公立高等学校は、2010年に全国で初めて小・中・高等部のある知的障害特別支援学校と同一敷地内に併設された高等学校である。この公立高等学校はキャンパスが2カ所にあり、知的障害特別支援学校と同一敷地内に併設されているキャンパスには専門学科が設置され、もう一方のキャンパスには普通科が設置されていた。専門学科の設置された校舎は2階に特別支援学校との連絡通路が設置され、中庭での日常的な交流が可能となっていた。専門学科のひとつは特別支援学校スクールパートナーとなっており、高等部等と交流及び共同学習を行ってきた。しかし、普通科にも年3回程度の学校行事の際に特別支援学校の生徒と接する機会がある。

本研究では、特別支援学校と異なるキャンパスで生活する普通科の生徒と、交流及び共同学習を経験してきた専門学科の生徒とにアンケートを実施し、その結果を比較することで、高校生に与える交流及び共同学習の効果について検討することを目的とした。

Ⅱ. 方法

1. 対象

知的障害特別支援学校を同一敷地内に併設されているキャンパスと、併設されていないキャンパスの2つキャンパスを有する公立高等学校 (1校) の生徒を対象とした。

対象とした生徒の概要は以下の通りである。

- ・知的障害特別支援学校が同一敷地内に併設されていないキャンパスの「普通科」の生徒254名
 - ・知的障害特別支援学校が同一敷地内に併設されているキャンパスの「専門学科」の生徒31名
- 「専門学科」の生徒は、知的障害特別支援学校高等部の生徒と交流及び共同学習を実施していた。

2. 期間

令和2年10月～11月

3. 調査および分析の方法

調査対象とした、普通科と専門学科の生徒両方にアンケート調査を行った。

アンケート調査は、四件法「4：とてもそう思う、3：そう思う、2：あまりそう思わない、1：まったくそう思わない」の質問紙形式で行った。得られた結果について、IBM社のSPSSを用いて「独立したサンプルのt検定」を用いて分析した。

4. アンケートの内容

◆ 特別支援学校との「交流及び共同学習」に関する項目

- ① 高等学校に入学する前から特別支援学校との交流及び共同学習があることを知っていた。
- ② 現在、特別支援学校との交流及び共同学習があることを知っている。
- ③ 特別支援学校との交流及び共同学習を楽しみにしている。
- ④ 特別支援学校との交流及び共同学習に対して積極的にとりこんでいる。
- ⑤ 体育祭や文化祭、昼休み交流などの希望制の交流に参加しようと思う。

◆ 障害に対する意識に関する事項

- ① 高校に入学される前、あなたは「障害」ということについて理解していましたか。
- ② 高校に入学される前、あなたは「障害」のある同年齢位の人と一緒に活動したことがありますか。
- ③ 特別支援学校との交流及び共同学習を経験された後、あなたの「知的障害」に対する考えは変わりましたか。
- ④ あなたが「障害」のある児童生徒たちと接することは、有意義だと思いますか。
- ⑤ 街中で障害のある人が困っている状況を見かけたら声をかけたり支援したりしたいと思いますか。
- ⑥ 将来の職業として、障害のある人にかかわる仕事に興味はありますか。
- ⑦ 将来の職業として、障害のある人にかかわる仕事につきたいと思いますか。

Ⅲ. 結果と考察

1. 生徒の属性

Table 1 生徒の属性

		性別			合計
		男子	女子	無回答	
学科	普通科	132	110	12	254
	専門学科	11	17	3	31
合計		143	127	15	285

2. 特別支援学校との交流及び共同学習に関するアンケート結果から

質問2-① 高等学校に入学する前から特別支援学校との交流及び共同学習があることを知っていた。

Table 2 質問2-①の平均得点の比較

普通科 n=254	専門学科 n=31	F値	t値	自由度	有意確率
2.08	2.87	4.76	-4.308	39.818	$p < .05$

普通科と専門学科の学生の平均得点をSPSSによる「独立したサンプルのt検定」を用いて比較した。その結果、普通科<専門学科で有意差 ($p < .05$) が見られた。

この平均得点を見ると、専門学科の生徒は普通科の生徒よりも交流及び共同学習があることを入学前から知っていたと解釈することができた。特別支援学校との交流及び共同学習について、高等学校のHPでも紹介されており、対象とした高等学校を志望する生徒は、入学前の情報としてそのことを得ていたと考えられた。特に、専門学科志望の生徒にとっては、知的障害のある生徒との交流及び共同学習があることを、ひとつの関心事と

してとらえていた可能性が高いと考えられた。

質問2-② 現在、特別支援学校との交流及び共同学習があることを知っている。

Table 3 質問2-②の平均得点の比較

普通科 n=254	専門学科 n=31	F値	t値	自由度	有意確率
2.49	3.65	24.10	-7.968	50.463	$p < .05$

普通科と専門学科の学生の平均得点をSPSSによる「独立したサンプルのt検定」を用いて比較した。その結果、普通科<専門学科で有意差 ($p < .05$) が見られた。この平均得点を見ると、専門学科の生徒は普通科の生徒よりも現在、交流及び共同学習が行われていることを知っていたと解釈することができた。

専門学科の生徒はほとんどの生徒が交流及び共同学習を経験している。また、普通科には交流及び共同学習が設定されていないが、高等学校への入学前より交流及び共同学習に対して平均得点が高く（質問①の回答2.08→質問②の回答2.49）、なっており、年3回程度の学校行事による間接的な交流が設定されていることによる効果ではないかと考えられた。

質問2-③ 特別支援学校との交流及び共同学習を楽しみにしている。

Table 4 質問2-③の平均得点の比較

普通科 n=254	専門学科 n=31	F値	t値	自由度	有意確率
2.05	3.16	0.51	-6.493	283	$p < .05$

普通科と専門学科の学生の平均得点をSPSSによる「独立したサンプルのt検定」を用いて比較した。その結果、普通科<専門学科で有意差 ($p < .05$) が見られた。普通科には年3回程度の間接的な行事による交流はあるが、交流及び共同学習の機会や日常的な交流の機会はない。一方で、交流及び共同学習の機会や日常的な交流の機会を設定されている。こうしたことから専門学科の生徒は、交流及び共同学習を肯定的に受け止め、楽しみにする気持ちが高まっていたと考えられた。

質問2-④ 特別支援学校との交流及び共同学習に対して積極的にとりくんでいる。

Table 5 質問2-④の平均得点の比較

普通科 n=254	専門学科 n=31	F値	t値	自由度	有意確率
1.87	3.23	1.77	-7.917	283	$p < .05$

普通科と専門学科の学生の平均得点をSPSSによる「独立したサンプルのt検定」を用いて比較した。その結果、普通科<専門学科で有意差 ($p < .05$) が見られた。普通科には交流及び共同学習の機会は設定されていないことからのマイナス評価（平均得点が2.00以下）と考えられた。専門学科の生徒はプラス評価となっており、継続的な交流及び共同学習は、積極的に取り組もうとする意欲につながると考えられた。

質問2-⑤ 体育祭や文化祭，昼休み交流などの希望制の交流に参加しようと思う。

Table 6 質問2-⑤の平均得点の比較

普通科 n=254	専門学科 n=31	F値	t 値	自由度	有意確率
2.08	2.74	0.00	-3.588	283	$p < .05$

普通科と専門学科の学生の平均得点をSPSSによる「独立したサンプルのt検定」を用いて比較した。その結果，普通科<専門学科で有意差（ $p < .05$ ）が見られた。

この平均得点を見ると，校舎が併設されている専門学科の「昼休み交流などの希望制の交流」に参加意欲が高まっていると解釈することができた。

3. 障害に対する意識に関するアンケート結果から

質問3-① 高校に入学される前，あなたは「障害」ということについて理解していましたか。

Table 7 質問3-①の平均得点の比較

普通科 n=254	専門学科 n=31	F値	t 値	自由度	有意確率
3.07	2.55	.924	3.245	283	$p < .05$

普通科と専門学科の学生の平均得点をSPSSによる「独立したサンプルのt検定」を用いて比較した。その結果，普通科>専門学科で有意差（ $p < .05$ ）が見られた。この結果を見ると，普通科の生徒の方が専門学科の生徒より高校入学前の「障害」に対する理解度が高いと解釈することができた。

質問3-② 高校に入学される前，あなたは「障害」のある同年齢位の人と一緒に活動したことがありますか。

Table 8 質問3-②の平均得点の比較

普通科 n=254	専門学科 n=31	F値	t 値	自由度	有意確率
2.55	2.77	.005	-1.063	283	.289

普通科と専門学科の学生の平均得点をSPSSによる「独立したサンプルのt検定」を用いて比較した。その結果，有意差はなかった。普通科と専門学科の平均得点は両者ともにプラス評価の傾向にあることから，「障害」のある同年齢位の人と一緒に活動したことがあると回答した生徒が多いと解釈できた。

質問3-③ 特別支援学校との交流及び共同学習を経験された後，あなたの「知的障害」に対する考えは変わりましたか。

Table 9 質問3-③の平均得点の比較

普通科 n=254	専門学科 n=31	F値	t 値	自由度	有意確率
2.50	3.23	2.665	-3.748	283	$p < .05$

普通科と専門学科の学生の平均得点をSPSSによる「独立したサンプルのt検定」を用いて比較した。その結果，

普通科＜専門学科で有意差 ($p < .05$) が見られた。質問①で普通科＞専門学科であったことを考えると、高等学校で交流及び共同学習を経験したことは、専門学科の生徒に対して「知的障害」に対する受け止め方に大きな影響を与えたと考えられた。一方で、交流及び共同学習が行われていないにもかかわらず普通科の生徒の平均得点がプラス評価の傾向にあることは、キャンパスは異なっても年3回程度の学校行事による間接的な交流が影響しているのではないかと考えられた。

質問3-④ あなたが「障害」のある児童生徒たちと接することは、有意義だと思いますか。

Table 10 質問3-④の平均得点の比較

普通科 n=254	専門学科 n=31	F値	t値	自由度	有意確率
2.89	3.48	.029	-3.531	283	$p < .05$

普通科と専門学科の学生の平均得点をSPSSによる「独立したサンプルのt検定」を用いて比較した。その結果、普通科＜専門学科で有意差 ($p < .05$) が見られた。

この平均得点を見ると、専門学科の生徒は普通科の生徒より「障害」のある児童生徒たちと接することを有意義だと感じていると解釈することができた。ただ、質問③に続いて交流及び共同学習が行われていないにもかかわらず普通科の生徒の平均得点もプラス評価の傾向にある。キャンパスは異なっても年3回程度の学校行事による間接的な交流が良い影響を与えているのではないかと考えられた。

質問3-⑤ 街中で障害のある人が困っている状況を見かけたら声をかけたり支援したりしたいと思いますか。

Table 11 質問3-⑤の平均得点の比較

普通科 n=254	専門学科 n=31	F値	t値	自由度	有意確率
2.95	3.35	.001	-2.287	283	$p < .05$

普通科と専門学科の学生の平均得点をSPSSによる「独立したサンプルのt検定」を用いて比較した。その結果、普通科＜専門学科で有意差 ($p < .05$) が見られた。

この平均得点を見ると、専門学科の生徒は普通科の生徒より街中で障害のある人が困っている状況を見かけたら声をかけたり支援したりしたいと考えていると解釈することができた。しかし、やはり普通科の生徒の得点がプラス評価の傾向にあることで、多くの生徒が障害のある人への支援を行おうとする意識があると受け止められた。

質問3-⑥ 将来の職業として、障害のある人にかかわる仕事に興味はありますか。

Table 12 質問3-⑥の平均得点の比較

普通科 n=254	専門学科 n=31	F値	t値	自由度	有意確率
1.95	2.68	8.266	-3.460	34.384	$p < .05$

普通科と専門学科の学生の平均得点をSPSSによる「独立したサンプルのt検定」を用いて比較した。その結果、普通科＜専門学科で有意差 ($p < .05$) が見られた。この平均得点を見ると、専門学科の生徒は普通科の生徒より障害のある人にかかわる仕事に関心が高いと解釈することができた。

質問3-⑦ 将来の職業として、障害のある人にかかわる仕事につきたいと思いますか。

Table 13 質問3-⑦の平均得点の比較

普通科 n=254	専門学科 n=31	F値	t値	自由度	有意確率
1.84	2.55	15.527	-3.250	33.592	$p < .05$

普通科と専門学科の学生の平均得点をSPSSによる「独立したサンプルのt検定」を用いて比較した。その結果、普通科<専門学科で有意差 ($p < .05$) が見られた。

この平均得点を見ると、専門学科の生徒は普通科の生徒より障害のある人にかかわる仕事につきたいと考えていると解釈することができた。

IV. まとめ

スクールパートナーとして、同一敷地内に特別支援学校が設置されている公立高等学校に在籍する生徒を対象として、障害に対する意識調査をした。調査校は、普通科と専門学科でキャンパスが2つに分かれていた。専門学科がある校舎と同じ敷地内に特別支援学校は設置されていた。

専門学科の生徒は、年に2回の授業交流や、昼食を一緒に食べる昼休み交流があるなど、毎日特別支援学校の生徒を身近に感じ、日常的に接する機会が多い。一方、普通科の生徒は、異なるキャンパスで生活していることから、特別支援学校の生徒と接する機会は、体育祭や文化祭などの行事交流で年に3回程度であった。

普通科と専門学科で比較したとき、特別支援学校との交流及び共同学習に意欲的かつ期待して取り組んでいるとの回答で有意に高い平均得点であったのは、やはり専門学科であった。専門学科は特別支援学校との日常的な関わりや交流及び共同学習が多い学科であった。

専門学科のアンケートの中の記述回答からは、「関わり方が分かってきた」ことや「特別支援学校の児童生徒と交流を通して仲良くなっている実感があり、特別支援学校の児童生徒に会うことが楽しみだ」という記述がみられた。

一方で、普通科のアンケートの中の記述回答からは、「関わりかたがわからない」や「交流したことがないかわからない」といった回答が多くみられた。日常的に関わる経験が専門学科より少ないことが理由と考えられた。しかし、多くの質問に対する回答の平均得点がプラス評価であったことから、年3回程度ではあっても学校行事の際に特別支援学校の生徒と接する機会があることは、生徒達に影響を与えていると考えられた。

日常的・継続的に交流及び共同学習に取り組まれることが行っていくことが理想ではあるが、特別支援学校の児童生徒と出会い、活動する機会を作ることが、インクルーシブな共生社会を構築する上で必要なことと考えられた。

本研究の結果から、交流を積み重ねたり、同一敷地内に特別支援学校があつたりすることからの障害理解等に関する影響は大きいことが示された。また、普通科の結果からは、機会が少なくとも、高校生という段階で特別支援学校の児童生徒との接する機会が設けられることは、インクルーシブな意識を育むために効果があることが示された。

参考文献

- 千田光久（2019）『幼稚園教育要領・小学校学習指導要領・中学校学習指導要領・高等学校学習指導要領にみる「交流及び共同学習」の歴史的変遷』
- 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所（2008）プロジェクト研究成果報告書『「交流及び共同学習」の推

進に関する実際研究』

- 文部科学省（1971） 養護学校小学部・中学部学習指導要領
- 文部科学省（1972） 養護学校（精神薄弱教育）高等部学習指導要領
- 文部科学省（1979） 盲学校，聾学校及び養護学校学習指導要領
- 文部科学省（1989a） 盲学校，聾学校及び養護学校幼稚部教育要領
- 文部科学省（1989b） 盲学校，聾学校及び養護学校小学部・中学部学習指導要領
- 文部科学省（1989c） 盲学校，聾学校及び養護学校高等部学習指導要領
- 文部科学省（1999a） 盲学校，聾学校及び養護学校幼稚部教育要領
- 文部科学省（1999b） 盲学校，聾学校及び養護学校小学部・中学部学習指導要領
- 文部科学省（1999c） 盲学校，聾学校及び養護学校高等部学習指導要領
- 文部科学省（2008a） 小学校学習指導要領
- 文部科学省（2008b） 中学校学習指導要領
- 文部科学省（2009a） 特別支援学校幼稚部教育要領
- 文部科学省（2009b） 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領
- 文部科学省（2009c） 特別支援学校高等部学習指導要領
- 文部科学省（2009d） 特別支援学校学習指導要領解説総則編等（幼稚部・小学部・中学部）
- 文部科学省（2017a） 小学校学習指導要領
- 文部科学省（2017b） 中学校学習指導要領
- 文部科学省（2017c） 特別支援学校幼稚部教育要領
- 文部科学省（2017d） 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領
- 文部科学省（2019a） 特別支援学校高等部学習指導要領
- 文部科学省（2019b） 交流及び共同学習ガイド
- 田村 緑・川合紀宗（2018） 小学校における交流及び共同学習の現状と課題に関する研究—教科におけるアクティブな「協同」学習を目指して— 広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要，16，93-102.
- 柘植雅義・小田浩伸・村野一臣・中川恵乃久（2017）『高等学校における特別支援学校の分校・分教室』，ジエース教育新社
- ユニバーサルデザイン2020関係閣僚会議（2017）ユニバーサルデザイン2020行動計画